

2016年7月14日

簡単解説！英国のEU離脱（Brexit） 第1回

全2頁

そもそも Brexit って何？

欧州債務危機後に加速した EU 離脱の動き

経済調査部

研究員 山口 茜

- ◆ Brexitとは、Britain/British（英国）と exit（離脱）を合わせた造語で、英国が EU から離脱することを指す
- ◆ Brexitは、ギリシャのユーロ圏離脱を指す“Grexit”の派生語
- ◆ 元々、英国はEUとは一定の距離を保ち、EU統合深化の動きに対しては一貫して消極的
- ◆ 2004年以降、英国では東欧諸国からの移民増加の影響でEUへの批判が強まっていた
- ◆ 欧州債務危機後、その解決策としてEUの統合深化が選択されたことが英国のEU離脱に向けた動きを加速させることに

はじめに

2016年6月23日、英国でEUに残留すべきか離脱すべきかを問う国民投票が行われ、離脱派が勝利を収めたことは大きなニュースとなりました。ニュースの中で、“Brexit”という言葉聞く機会も多かったのではないのでしょうか。Brexitとは、Britain/British（英国）と exit（離脱）を合わせた造語で、英国がEUから離脱することを指します。

ルーツは Grexit？

Brexitという言葉は、“Grexit”の派生語と言われています。Grexitとは、Greece（ギリシャ）と exit（離脱）を合わせた造語です。まずは、Grexitという言葉の誕生から振り返ってみましょう。

2009年10月、単一通貨であるユーロを共有する国の1つであるギリシャが巨額の財政赤字を隠していたことが発覚します。ユーロ参加国には、財政赤字を対GDP比3%以内、政府債務残高を同60%以内に抑えることが定められていますが、ギリシャが隠していた赤字や借金はそれを大幅に上回る額でした。

ギリシャの財政不安はユーロへの信頼を揺るがしかねないということで、2010年5月、EUと

IMFによるギリシャへの財政支援が決定します。しかし、ギリシャの財政・経済状況は改善しませんでした。そのような状況下で、アイルランド、ポルトガル、スペイン、イタリア、と他のEU加盟国でも財政不安が問題視され始め、事態は欧州債務危機へと発展しました。

2012年2月、EUとIMFが対ギリシャの第二次支援策に合意しますが、この2回目の支援をするか否かの議論の中で、「ギリシャのユーロ圏離脱」の可能性が取り沙汰されました。その背景には2つの考えがあります。1つは、ギリシャを再建するには、ギリシャが通貨を単一通貨のユーロから自国通貨に変更（ユーロ圏から離脱）した上で、自国通貨を大幅に切り下げることが有効であるという考えです。もう1つは、そもそもギリシャはユーロ圏に加盟する際、本当はユーロ導入基準を満たしていなかったのにもかかわらず虚偽の申告をして加盟したということから、ユーロ圏の障害となっているギリシャは追放すべきだという考えです。このような議論が繰り返される中で、“Grexit”という言葉が誕生しました。

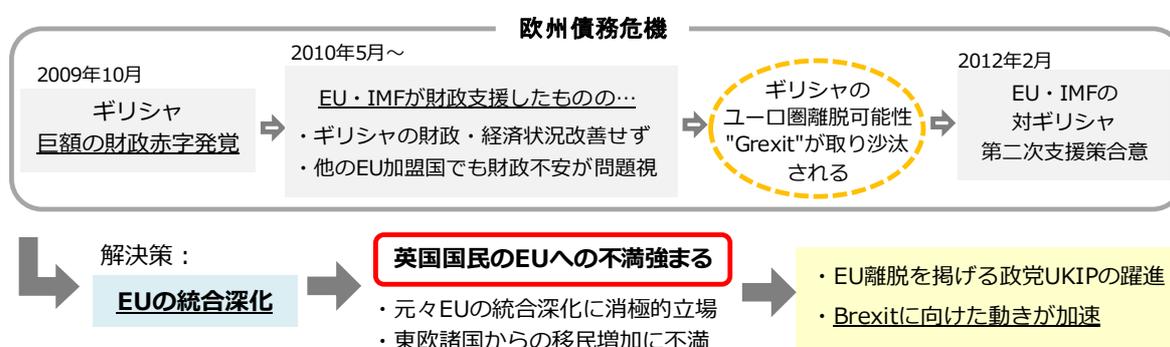
欧州債務危機、そして、Brexitへ

欧州債務危機の解決策として見出されたのは、経済政策や財政政策にまで踏み込んだ「EU域内のさらなる統合深化」でした。このことは、英国国民のEUに対する不満を強めていきます。

元々、英国はEUとは一定の距離を保ち、EU統合深化の動きに対しては一貫して消極的でした。さらに、2004年以降EUに加盟した東欧諸国からの移民の増加も、英国国民のEUへの不満を強めていました（詳しくは後の連載で解説します）。

そこに追い打ちをかけるようにやってきた欧州債務危機は、英国のEU離脱に向けた動きを加速させます。そして、EU離脱を党の主な目的として掲げる英国独立党（UKIP）が地方選挙で躍進し始めるなど、“Brexit”の可能性が取り沙汰されるようになりました。

そのような状況下で、ついにキャメロン首相（当時）は英国のEU離脱の是非を問う、国民投票を実施することを決定します。このことについては次回詳しく解説します。



(出所)大和総研作成

(次回予告：英国が国民投票を選択した理由)